『後二条院百首』考

――九州大学図書館蔵本の紹介を兼ねて――

山崎桂子

はじめに

『後二条院百首』は、有吉保・田村柳壱両氏によって、近年その翻刻と紹介がなされ（『後二条院百首』（仮称）――翻刻と紹介――、『語文』第五二輯、昭和56・6）、注目された資料である。両氏もその中で述べておられる如く、『後二条院百首』の存在は従来指摘されながらも、詳細な紹介や研究はなされないままであった。その点で、有吉・田村両氏の翻刻と紹介は貴重なものである。

両氏は、『後二条院百首』の伝本として、(1)大阪大学国文学研究室蔵『後鳥羽院御集』附載本と、(2)国立公文書館蔵内閣文庫本『詠法華経百首和歌』（尊円親王和歌百首）附載本とを紹介され、その内容・成立、資料的価値を述べられた上で、(1)大阪大学国文学研究室蔵本を底本として翻刻し、(2)国立公文書館蔵内閣文庫本で校合をされている。

ところで、私事にわたるが、私も三年前に後鳥羽院御集の諸本を調査していて、御集に附載されたこの百首を知った。しかし、その時はそれが後二条院の百首であるとは気づかず、後鳥羽院の新出の百首ではないかと心躍らせたが、後に大阪大学国文学研究室蔵の後鳥羽院御集（以下、阪大本と略称する）を見て、その百首の内題が「後鳥羽院御百首」と見せ消ちとなっていることから疑念を抱き、有吉保氏の指摘（『私家集大成　第四巻　中世Ⅱ』後鳥羽院解題七一一頁）を知るに及んで、後二条院の百首であることを確認した。

私が最初に見た『後二条院百首』は、九州大学附属中央図書館蔵萩野文庫本『後鳥羽院御集』（以下、九大本と略称する）に附載されたものであった。それから順次、阪大本、内閣文庫本と東へ見て行ったことになる。この他にも『後二条院百首』を伝える伝本はないものかと、いろいろ捜してみたが、右の三本の外には今のところ出会わない。

さて、この九大本については、有吉・田村両氏の紹介にないので、この九大本『後鳥羽院御集』附載の『後二条院百首』について、両氏の御研究に拠りつつ、簡単な紹介をしたいと思う。

（一）

まず、九大本『後鳥羽院御集』の書誌について記す。尚、この伝本は、『国書総目録』には載せるが、『私家集伝本書目』には未載である。

○九州大学附属中央図書館蔵萩野文庫本『後鳥羽院御集』

整理番号（萩野文庫　コ　六五）。列帖装一冊。縦一八・〇糎、横一二・六糎。表紙は若草色地に金糸で牡丹花文様を織る布表紙。表紙左肩に題簽（鳥の子、小短冊、上部に縹色打曇り）があり、外題は「後鳥羽御集上」。本文料紙は鳥の子。見返しは本文共紙に、銀の切箔散らし。墨付七七丁。遊紙は首一丁、尾六丁。一面十行。一首一行書。虫損もなく、丁重な保存がなされていたようである。但し、外題に「後鳥羽御集上」とあるも、下冊にあたるものはなく、恐らく佚したものと思われる（後述）。書写は江戸初期のものと覚しい。

また、首の遊紙表に、縦一二・四糎、横一・五糎ほどの楮紙片を貼っており、それには「松崎主計頭殿俊章朝臣」と墨書している。第一字目「松」は楮紙片の剥落によって読みにくくなっている。松崎主計頭は、『顕伝明名録』（日本古典全集）によると、「小川坊城俊完卿末子、号松崎主計頭」とある。父の俊完は、『公卿補任』によると、慶長一四年（一六〇九）の生まれ、明暦三年（一六五七）に前権大納言正二位で出家し、法名を常空と言う。俊章はこの俊完の末子に当るわけだが、『顕伝明名録』以上の事は今のところわからない。ちなみに、俊完の男で俊章の兄にあたる俊広は、寛永元年（一六二四）の生まれで、元禄一五年（一七〇二）に、従一位前権大納言（六十才）で薨じている（公卿補任）。この俊広は、『日本書蹟大鑑』（小松茂美編、講談社）に、根津美術館蔵の短冊一葉を以て手蹟が紹介されている。

「松崎主計頭殿俊章朝臣」という紙片は一体何を意味するのであろうか。「――殿――朝臣」という表記は不審であるが、或は俊章の書写、所蔵にかかったということであろうか。俊章には、著作その他見あたらない。

その他に、首の遊紙の表と第一丁表とに「竹□歌女輔」の朱印を捺す。□の所は押印が鮮明でないため判読に苦しむが、「紫」または「柴」と読まれる。「竹紫（柴）歌女輔」とは誰のことなのか、今のところ不明である。尚、萩野文庫は、萩野由之氏の旧蔵書が寄託されたものである。

以上が九大本『後鳥羽院御集』の書誌であるが、後二条院の百首はこの奥に附載されている。ところで、九大本『後鳥羽院御集』は阪大本の『後鳥羽院御集』と同系で、非常によく似ており、恐らく二本は兄弟本というに近い関係であると推察される。しかし、惜しむらくは、先述の如く九大本は上冊のみで下冊を欠いている。が、もとは阪大本と同じく上下二冊であったものと思われる。（後鳥羽院御集の写本は通例一冊本であるが、阪大本・九大本のみ上下二冊にわかれており、形態的にも共通する。）

阪大本『後鳥羽院御集』の内容や、御集伝本中での特色などについては、小島吉雄氏の『和歌文学大辞典』に於ける記述、有吉保氏の『私家集大成』（前述）解題に詳しいので、今は触れないが、私の調査したところでは、御集伝本で、この増補本系にあたるのは今のところ阪大本と九大本の二伝本のみである、二伝本とも増補部分

に後二条院の百首を収めるわけであるから、従って後二条院百首も後鳥羽院御集に附載されたものとしてはこの二本のみということになる。

さて、九大本附載の『後二条院百首』は阪大本と同じく、御集上冊の六二丁表から七〇丁裏の中ほどまでに収められている。六一丁までは、後鳥羽院の作品――正治初度百首から詠五百首和歌まで――が書写され、七〇丁裏の中ほどからは、また増補された後鳥羽院の作品――「七條院けふあすとも知ぬ身に……、たらちめのきえやらて待露の身を風よりさきにいかてとはまし」「家隆卿和哥はむかしよりの……、波間なきおきのこしまの浜ひさし久しく成ぬ都へたてゝ（他十一首）」「遠島百首」――が書写されている。上冊すべて同一筆になる。

九大本の場合、『後二条院百首』部分の内題はなく、いきなり「春二十首」で始まっている（阪大本は「後鳥羽院御百首」、内閣文庫本は「後鳥羽院御百首」の内題を持つ）。歌数は九十九首で、阪大本・内閣文庫本と同じである。また、阪大本が六八丁と六九丁との間に位置すべき81番歌から90番歌までの一丁を上冊最末尾に誤綴している（有吉・田村氏論文）という点は、九大本には見られず誤綴はない。その他、九大本は『後二条院百首』恋の部の61 62 63 65 66 67 68 69 70 71 75 76の十二首につき、歌頭に○印（墨、後筆と覚しい）を付す。

（二）

『後二条院百首』の本文について、内閣文庫本・阪大本・家集[1]に、九大本を加えて、比較・考察してみると、以下の如く三点のことがわかる。

(1)阪大本と九大本には、共通する親本xを想定でき、両本はそのx本からの転写本で、兄弟本にあたると思われる。（x本は既に『後二条院百首』を附載した『後鳥羽院御集』の形であったろう。）

この点については次のような異同を掲げることができる。（以下、歌の引用は阪大本によってする。番号も有吉・田村両氏の付けられたものと同じである。

8　梅か香をしるへにはしてしり知すなにゝあやなくやとはわくへき　（梅）

第四句を内閣文庫本・家集では「なにかあやなく」とし、阪大本・九大本は「なにゝあやなく」とする。この歌は、伊勢物語「右近の馬場のひをりの日」の段の歌、

しるしらずなにかあやなくわきていはむおもひのみこそしるべなりけれ　（伊勢物語・古今集477）

と、もう一首、

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる　（古今集13）

に拠って詠まれている。従って、本文としては、内閣文庫本・家集の「なにかあやなく」が良いと思われる。阪大本・九大本は、踊字を「か」に誤ったものであろうが、両本の類似性が指摘できる。

15　山さくらはれさく花に物そおもふよしのゝ嵐吹そめしより　（花）

第二句が内閣文庫本は「はれせて」、阪大本は「はれさく」、九大本は「かれさく」となっている。恐らく、「せて」の連綿が「さく」と誤写され、その「はれさく」に疑問を持った阪大本が「本ノ」と

注記し、九大本は更に、「は」と「か」の誤写を想定して、「かれさく」（枯咲く）と意味をとろうとしたのであろう。本来的には、やはり「はれせて」とあるべきで、吉野の嵐の吹き初めた日から、心は花への物思いですっきりと晴れることもないという気持であろう。「はれせで」とは、心理的な状態と同時に、吉野山が嵐によって白く曇り、山桜がはっきりと見えなくなっている状況をも示しているのだろう。ここは、「はれせて」を「はれさく」と誤写したx本を想定して、それをそれぞれ書写したのが阪大本と九大本と考えるのが妥当であろう。

24　白雲の道ゆきふりのほとゝきすたかことつての事かたらなん
（郭公）

第五句を、内閣文庫本・家集は「かたるらん」とし、阪大本・九大本は「かたらなん」とする。「たかことつての事」を「かたる」のであるから、ここはあつらえでなく、推量の「かたるらん」が良かろう。恐らく「る」と「ら」の誤写（本ノ）であろう。

29　なる神のこゑのとをちにぬるまゝにふりすきて行夕立の雨
（夕立）

第二・三句を、内閣文庫本は「こゑのとをちになるまゝに」、阪大本は「こゑのとをちにぬ（本ノ）るまゝに」、九大本は「こゑのとをちにぬるまゝに」、家集は「こゑのとをにちなるまゝに」とする。「とをち」とは「とほち（遠方）」の意である。玉葉集には、

夕立のとほちを過ぐる雲の下に降り来ぬ雨ぞよそに見え行く
（九條左大臣女、玉葉集　414）

暮れかゝるとほちの空の夕立に山の端みせてたらす稲妻
（藤原定成朝臣、玉葉集　421）

などと、夕立を詠んだ歌が見え、家集の本文「こゑのとをにちなるまゝに」は語義を見失った誤伝である。本来は内閣文庫本の如く「とをちになるまゝに」が正しく、雷の声が遠くなってゆくにつれて、さっと降り過ぎてゆく夕立の雨であるよ、との意であろう。阪大本・九大本については、15歌の場合と同様に、x本が、「なるまゝに」を夕立の連想から「ぬるまゝに」と誤写し、疑念を抱いた阪大本は「本ノ」と注し、九大本はx本そのままを書写したのであろう。

45　よこ雲のあくる外山をよそに見て月はよふかき物（西）の空哉（月）

第二句を内閣文庫本のみ「あくる外山も」とするが、意味的には諸本に拠って「あくる外山を」が良かろう。下句の第五句にも異同があり、内閣文庫本は「西の空哉」、阪大本は右掲の如く「物の空哉」をミセケチで「西」と訂している。一方、九大本は「物の空哉」としている。ここはもちろん「西の空哉」が正しいが、阪大本・九大本の親本xが誤って「物の空哉」としていたらしいことが窺える。阪大本はそれに気づいて訂し、九大本はそのまま書写したのである。

74　つれなしと恋うれし（ら欠）世はむかしにて心うはさ（よ欠）の身をそうらむる
（逢不逢恋）

この歌も先の例と同様で、阪大本・九大本の親本は同一のx本で、このx本が誤った本文を伝えていたことを示すものである。すなわち、第二句を内閣文庫本・家集は「恋られし」とし、阪大本は「恋うれし（ら欠）」、九大本は「恋うれし」とする。また、第四句も内閣文庫本・家集は「心よはさの」、阪大本は、「心うはさ（よ欠）の」、九大本は「心うはさの」とする。いずれも内閣文庫本・家集本文に拠るべきところである。

(2)家集本文と他三本との異同のうちには、単なる書写時の誤写に

よって生じたのではなく、百首から家集へ選ばれる時に改作が行われたために生じたと思われるものがある。

14　色まかふ雲なへたてそはなのあたり見つゝしのはんみよし野の山　（花）

この歌の第四句は、内閣文庫本・阪大本・九大本共に「見つゝしのはん」であるが、家集では「見つゝくらさん」となっている。花の色とまがえてしまいそうな白雲よ隔ててくれるな、私はみよし野の山の桜を見ながら暮らそうと思っているのだから、との意であれば家集の本文の方が良い。他の三本の「しのはん」では、上句で「雲なへたてそ」と言っていることと吻合しない。「くらさん」と「しのはん」の両本文の間では誤写の可能性も考えにくいので、百首を詠んだ当初は「しのはん」だったものが、精撰される時に「くらさん」と改められたのではなかろうか。

47　誰ならんさきたつこまの音はして霧にこめたるせたの長はし（霧務）

第四句を家集のみ「霧にへたつる」とする。

93　住吉の神もあはれとまもらなん心にかゝる秋（本ノマヽ）けのうらなみ　（述懐）

第五句は、内閣文庫本・家集が「和哥のうらなみ」、阪大本が「秋（本ノマヽ）けのうらなみ」、九大本が「秋けのうらなみ」で、これは「和哥のうらなみ」が正しく、(1)の用例として掲げられるものである。改作かと思われるのは第三句で家集のみ「おもはなん」とする。

以上の他にも、改作かと思われる所が数箇所ある。後二条院の家集自体にも、見せ消ち・重ね書き・補入・傍書などが見られ、推敲がなされたのであろう。

(3)内閣文庫本・阪大本・九大本・家集の四本のうち、一つの伝本の本文が全面的に良いとは言えない。ある本が良い本文を伝えていることもあり、また逆である場合もある。従って、四本を併せ考察する必要がある。しかし四本のうち、九大本は書写時のケアレスミスと思われるものが比較的多く、留意せねばならない。

16　たれかこの雪と月とにたくへけんなへてにもあらぬ花の色香を　（花）

第五句「花の色香を」を、内閣文庫本のみ「花の色かも」とする。内閣文庫本の誤写であり、阪大本・九大本の本文の方が良いと思われる例である。同様の例に、

90おとろかてなれぬる程もあはれ也なくさをしかの庭の草ふし　（山家）

がある。第四句を内閣文庫本のみ「なくまをしかの」と誤写している。また、

87　会坂やのこりの月の関の戸を鳥の音きゝてこゆるたひ人（関）

の歌では、内閣文庫本は第四句を「鳥のきゝて」と一字脱している。

一方、次の例、

48　なかれ行末はとまらすたつた川もみちのかけをあらふ白波　（紅葉）

では、第二句を阪大本・九大本が「末はとまらす」とし、内閣文庫本・家集が「末はそまらす」とする。この歌は、紅葉の流れる立田川も末（下流）になると白波に洗われて、唐紅には染まらないことだ、という意であろうから、ここは内閣文庫本・家集の本文が良いことになる。

また、内閣文庫本・阪大本・九大本の三本とも誤写を生じたかと思われる例もある。

50　暁のかねまつ程のうきのまを秋とおもふそかなしかりける　（九月尽）

この歌の第三句を内閣文庫本・九大本は「うきのまを」とし、阪大本は右掲の如く「うきのまを」とするのに対し、家集のみ「時のまを」とする。この歌の題は「九月尽」で、秋を惜しむ心の歌であるから、暁の鐘を待つ程の短い時の間を、残り少ない秋と同じようなものだと思うことは悲しいことだ、の意であり、「時のまを」が正しい。「と」と「う」の誤写であろう。ここは三本が誤っている一例である。

九大本のケアレスミスには、「り」と「る」の誤写（43・76）、「な」と「れ」の誤写（99）などがある。

以上の三点の他に気づくところで、阪大本には他本との校合を思わせる異文表記があることをあげておきたい。

63　心より又はもらさむわかこひをなみたはしりて年ふりにけり　（忍恋）

異文表記があるのはこの一首だけで、阪大本独自のものである。内閣文庫本も九大本も「もらさむ」で、「もらさぬ」とする本はない。すると、阪大本のみ今日知られない異本で校合されたのであろうか。しかし、63番歌を眺めてみると、本来の本文「もらさむ」は意味的におかしいことに気づく。私のこの恋心は、我心の他には何にももらさなかったのに、どういうわけだか涙はその恋心を知って流れて、もう長い年月がたってしまった、との意であろうから、「もらさぬ」の打消でないとおかしい。三本とも「もらさむ」で伝えているところから見ると、院自身が「もらさむ」としていた可能性もある。

ところで、阪大本には、上冊の六一丁表（後鳥羽院の詠五百首和歌のあと）に、「印本是迄有」（貼紙）とあり、裏見返しに「読合早」「墨付七十七枚」、下冊にも七二丁表（後鳥羽院の嘉禄二年自歌合のあと）に、「印本是迄有」（貼紙）、裏見返しに「読合早」「墨付八十五枚」とある。「印本是迄有」とは、阪大本がx本を書写した後、承応二年版本と対校されたことを示している。もちろん「印本是迄有」以下のところは版本に無いのであるから、後二条院百首の部分は版本と対校されるはずはない。「読合早」とは、阪大本がx本を書写した際、書写の確認をしたということであろう。本文中の書入れ「本ノ」「本ノマヽ」「〇欠」などは、全て本文書写と同時の同一筆であるが、問題の63番歌の「ぬイ」は、本文と同一筆としても、墨色から見て本文書写時に書かれたのではないように見える（このような例は、七〇丁裏の「七条院」の注記「殖子贈左大臣信隆女後鳥羽御母」も同様である）。恐らく、x本書写後、確認の読合の折にでも、63番歌の「心より又はもらさむ」に不審を抱き、「ぬイ」と書入れたのではあるまいか。従って、「もらさぬ」という本文の異本があったわけではないと考えた方が妥当であろう。

（三）

『後二条院百首』の内容、すなわち歌自体について、気づいたところ二点を記して本稿を結びたい。

一点は、後二条院の本百首には、古今集からの本歌取りが多く見られるということである。例をあげると、

2　をしなへてかすむやいつこあまつ空めにはさやかにみえぬ春哉　（霞）

は、古今集秋一六九、藤原敏行朝臣の、

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

に拠って詠まれている。また、次の歌、

4　野へちかく年の内より家ゐしてまつうくひすの声を聞かな（貫）

は、古今集春一六、読人しらずの

野辺ちかく家ゐしせれば鶯のなくなるこゑはあさな〳〵きく

をもとに、「年の内より」野辺ちかく家ゐして、初音を聞くというふうに、ほんの少し趣向を変えただけである。

6　白妙に袖ふりはへてこよろきやめさしも春といそなつむ也（若菜）

この歌は、古今集春二二、貫之の

春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

と、同じく古今集東歌一〇九四の、

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ波

とを本歌として詠まれている。また、本文の異同について述べた際掲げた、

8　梅か香をしるへにはしてしり知すなにかあやなくやとはわくへき（梅）

は、伊勢物語（古今集四七七）の「しるしらず……」の歌と、古今集春一三の「花の香を……」の歌に拠って詠まれていた。

77　かれぬやと待し月日にわすれ草しけりのみして霜はむすはん（忘恋）

この歌は、初句「かれぬやと」は内閣文庫本。阪大本で、九大本は「かれぬとや」とする。また、第五句も異同があり、「霜はむすはん」は阪大本・九大本で、内閣文庫本は「霜はむすはす」とする。77歌の本歌は、古今集恋八〇一、宗于朝臣の

忘草かれもやすると つれもなき人の心にしもはおかなん

である。古今集のこの歌をふまえて、後二条院詠は、忘恋を詠んでいる。その歌意は、恋しい人のことを忘れてしまうと言うあの忘草なんて、霜が降りて枯れてしまうだろう（また思い出してくれるだろう）と期待して待っていた月日のうちに、なんと忘草はすっかり繁ってしまう一方で、一向に霜が降りて枯れるなどということはないことだ、となろう。従って、本文としては、初句は、「とや」「やと」いずれでも良いが、第五句は内閣文庫本の「霜はむすはす」の打消しでなくてはならない。このように、後二条院詠には、古今集の歌を本歌としたものが多く見られる。

もう一点の気づきは、次の歌、

31　いとはやとすゝしきかせかをとめこか袖ふる山に秋たつらしも（初秋）

に関してである。この歌は、『後二条院百首』秋の部の第一首目である。本歌としては、拾遺集雑恋一二一〇、柿本人丸の、

少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世よりおもひそめてき

があげられるが、もっとよく類似しているのは、

この寝ぬる朝げの風の少女子が袖ふる山に秋やきぬらむ

という後鳥羽院の歌である。拾遺集人丸の恋の歌を、秋の歌にしている点や、特に第二句以下は強い影響関係を想わせる。後鳥羽院詠は、建保四年の百首のもので、秋の第一首目、続後撰集秋上の巻頭歌（二二九）でもある。

後二条院の31歌と後鳥羽院の建保四年百首中の歌との類似は、『後二条院百首』がなぜ後鳥羽院の百首であると誤って伝えられたのか、

という疑問に関わってくる。本来、この百首は、後二条院自身によって、「百首」或いは無外題とされていたものであろうが、どういう事情で、内閣文庫本の如く「後鳥羽院御百首」とされたり、阪大本や九大本の如く『後鳥羽院御集』に附載されたのであろうか。そもそもの『後二条院百首』の詠出事情については、有吉・田村両氏によって、「恐らくは嘉元仙洞百首題を借りて私的に詠んだ百首歌とみるのが妥当であろうと思う。」（前掲論文）と推測されている。そのような私的な百首歌であれば、いつ、何の折での、誰の詠であるのか不明となってしまう可能性は大きい。しかし、それを何の理由もなく、何某の歌であると決めつけたりはしないはずである。

『後二条院百首』が後鳥羽院の百首であると誤まられた理由は何か。この点に関しては、推測の域を出ないのだが、先の歌の類似のように、後二条院詠と後鳥羽院詠の類似ということがあったためではあるまいか。詳細に検討して行けば、もっと両者の類似歌を捜しうるかもしれない。そのような目で眺めると、『後二条院百首』巻頭の歌、

1　春たつとおもひあへぬにのとけきはいつる朝日や空にしるらん
（立春）

と、巻軸の歌、

99　天津空はれたるあさになくたつの行すゑとをき声ものとけし
（祝）

とは、後鳥羽院の正治初度百首巻頭歌（御集本）、

いつしかとかすめる空ものどかにて行末遠しけさの初春

と、巻軸歌、

千早振日よしの影ものどかにて波おさまれるよもの海哉

を想い出させる。後鳥羽院の正治初度百首の巻頭・巻軸歌については、既に対応関係にあるという指摘(2)もあるところであるが、後二条院詠も、「のとけき」（1）「のとけし」（99）と対応しているようである。また、後二条院の99歌が、第四句に「行すゑとをき」としているところは、後鳥羽院の巻頭歌の第四句「行末遠し」と類似している。「のどけし」という詞に、両者の帝王風の詠みぶりが窺えるとは言えまいか。

以上、とりあえず二点の気づきを記して、後二条院の歌風など細い内容については後日に俟ちたい。

（昭和五七年八月稿）

〈注〉

（1）家集とは、後二条院自撰の家集『愚藻』のことである。この家集は、前半部と後半部から成り、前半部（愚藻）は一四一首、後半部（百首中）は七五首。後半部の七五首は、後二条院自身の手によって、度々の百首中から合点歌を書出したもので、『後二条院百首』はこの後半部所収歌と三五首重複する。すなわち、『後二条院百首』などの百首類から書き出された合点歌の集成が後半部なのである。従って、『後二条院百首』中の三五首については、家集の本文との比較が可能なわけである。尚、家集『愚藻』は、『列聖全集　御製集』『桂宮本叢書　第二十巻』『私家集大成　第四巻　中世Ⅱ』に収められており、解題も付けられている。本稿では、『私家集大成』に拠った。

（2）寺島恒世氏、「正治二年初度百首」考――後鳥羽院の百首歌

について――（『言語と文芸』81号）

〈付記〉
本稿を成すにあたり、貴重な資料のえつらんをお許し下さった九州大学附属図書館に感謝申し上げる。また、成稿後は、稲賀敬二先生の御高閲を仰いだ。記して御礼申し上げる。

（広島大学大学院博士課程後期在学）